

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 18 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25370771

研究課題名(和文) 東アジアにおける日本古代文書論の再構築

研究課題名(英文) Reconstruction of Japanese ancient documents in the East Asia

研究代表者

市 大樹 (ICHI, HIROKI)

大阪大学・文学研究科・准教授

研究者番号：00343004

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、「東アジアにおける日本古代文書論の再構築」を目指して、文書の機能、紙と木の使い分け、文書伝達と口頭伝達との関係に注意を払いながら、木簡・古文書・編纂史料の相互比較をおこなった。研究成果は多岐にわたるが、日本古代木簡の視覚機能という新たな視点を打ち出したこと、日本古代木簡の源流に関する見通しを得たこと、文書伝達のあり方を明らかにしたことが、特に大きな成果としてあげられる。研究成果は複数の学会報告・雑誌論文・図書などの形で公表した。学会報告は中国・イギリス・フランスでもおこない、図書のなかには韓国語に翻訳された図書もあり、研究成果を国内外を問わず発信できた。

研究成果の概要(英文)：I mutually compared wooden tablets with documents and compilations in order to reconstruct the system of the Ancient Japanese documents in the East Asia, focusing on the function of documents, the use division of the paper material and wood material, the relationship between document transmission and vocal communication. I got some new academic research results, visual functions of ancient Japanese wooden tablets, origins of ancient Japanese wooden tablets, communication in writing using transportation system, and so on. I presented papers at academic conferences, not only in Japan but also in China, England, France. I made some academic research reports. And I wrote some books, including Korean translated book.

研究分野：日本古代史

 キーワード：文書の機能 紙と木の使い分け 文書伝達と口頭伝達の関係 木簡の視覚機能 日本古代木簡の源流
 都鄙間交通 天聖令

1. 研究開始当初の背景

日本の古文書学は、久米邦武『古文書学講義』(1903年)、黒板勝美『更訂国史の研究総括』(1931年)に代表される研究に始まり、〈文書の様式〉を中心に長年議論されてきた。その到達点が、佐藤進一『古文書学入門』(1971年)であった。その後、佐藤進一氏は「中世史料論」(1976年)において、〈文書の機能〉に関する研究の重要性を説き、新たな転換が図られることとなる。

日本古代史の分野において、特に大きな研究成果をあげているのが、正倉院文書に関する分野である。東大寺写経所が残した一大文書群である正倉院文書を取り扱うためには、膨大な数の文書の接続関係を確認しながら復元作業をする必要がある。その際、断簡の山を個々の写経事業ごとに仕分け、それらを「事務処理」あるいは「仕事」ごとに分類していく方法がとられた。こうした正倉院文書の復元研究は、〈文書の機能〉を追求する視点をもたらし、石上英一『日本古代史料学』(1997年)、山下有実「文書と帳簿と記録」(1998年)、杉本一樹『日本古代文書の研究』(2001年)など、新たな古代文書論の模索がなされつつある。

一方、従来の古文書学研究は、中世以降の文書が主たる材料として論じられてきた。古代の文書については、公式令の規定をなぞっただけの文書様式の説明のみで済まされる傾向にあった。しかし正倉院文書や木簡などの実例では、公式令の規定に合致しないものが極めて多い。そこで、早川庄八『日本古代の文書と典籍』(1997年)は、公式令の枠組みにとらわれない、新たな「古代の古文書学」確立の必要性を説いた。

2. 研究の目的

こうした研究状況を受けて、報告者は、平成22~24年度に「木簡・正倉院文書・編纂史料の相互比較による日本古代文書論の再構築」(科学研究費・基盤研究(C))に取り

組み、〈文書の機能〉、〈紙と木の使い分け〉、〈文書伝達と口頭伝達との関係〉などに留意しながら、飛鳥・奈良時代を対象に検討を加えた。その研究成果の一端については、複数の学術論文および口頭発表として発表するとともに、一般書の形ではあったが、2冊の単著『すべての道は平城京へ—古代国家の〈支配の道〉—』(吉川弘文館、2011年、総258頁)、『飛鳥の木簡—古代史の新たな解明—』(中央公論新社、2012年、総287頁)として公表することができた。

以上を受けて本研究では、飛鳥・奈良時代の状況をより一層精緻に分析するとともに、平安時代の行政文書も対象に組み入れ、木簡、古文書、編纂史料、古記録の相互比較をおこなうことで、「日本古代文書の再構築」を目指したい。その際、中国・韓国の状況にも広く目配りすることによって、「東アジア古代文書論の構築」に向けての布石としたい。

3. 研究の方法

上記のような研究目的のもと、以下のような研究方法で検討を進めることとした。

(1) 飛鳥・奈良・平安時代の木簡の検討

本研究における最も基本的かつ中心的課題は、日本古代木簡の研究を着実に進めることである。特に次の2点に留意する。①木簡は文字資料であるが、発掘調査によって出土した考古資料でもある。木簡が出土した遺跡・遺構の状況を十分に踏まえ、木簡の形状にも留意しながら、文字だけからは窺われない情報を最大限に読み取る。そのために、現場のフィールド調査、木簡の実物調査を重視する。②木簡を群として捉える視点にたつて、木簡のライフサイクル(木簡が作成された後、いかにして使用され、最終的に廃棄されるにいたったのか)を明らかにする。木簡のライフサイクルの解明は、〈木簡の機能〉を追求することに直結する。木簡の使用場面を具体的に思い描きながら、場面ごとに木簡の機能

を追求していく。

(2)木簡とその他諸史料との比較研究

木簡と同様の〈機能〉をもつ文書を、その他史料（古文書、編纂史料、古記録など）のなかから抽出し、次の2点から比較研究をおこなう。①〈紙と木の使い分け〉、〈文書伝達と口頭伝達との関係〉を念頭におきながら、日本古代の行政システムにおける〈文書の機能〉を追求する。②〈文書の機能〉が〈文書の様式〉といかなる関係にあるのかを検討する。この作業を通じて、従来の文書様式論の問題点を再認識し、その克服を目指す。その際、日本の中世以降の文書研究にも目配りをし、有効と思われる視点は取り入れる。

(3)東アジアを視野に入れた、日本古代文書論の再構築

本研究の最終目標は「東アジア古代文書論」の構築であるため、単に日本にのみ通用する論理ではなく、東アジア世界に通用する論理を考える。そこで次の2点にも取り組む。①中国ではすでに秦漢時代には〈行政文書の原理・原則〉が確立しており、その後の東アジアに大きな影響を与えている。これまで日本と中国の比較研究では、同時代となる唐代や、その前代の南北朝時代が専ら対象となってきた。こうした研究の重要性は改めていうまでもないが、「東アジア古代文書論」を組み立てるためには、秦漢時代にまで遡って〈原理〉〈原則〉を見極める視点をもつ必要があり、その研究成果を吸収していく。②近年、韓国古代木簡の出土が相次ぎ、日本に直接の文化的影響を与えた朝鮮半島の状況が具体的にわかるようになってきた。現在知られている韓国木簡はまだ約700点に限られるが、今後出土点数が増加することは間違いなく、その研究に本腰を入れて取り組む。

4. 研究成果

上記の方針で検討を進めていった結果、以下のような研究成果があがった。

(1)飛鳥・奈良・平安時代の木簡の検討

木簡図録や発掘調査の報告書などを使って幅広く資料収集するとともに、必要に応じて木簡の所蔵機関に足を運んで木簡の現物調査をおこない、木簡出土遺跡を中心とするフィールド調査も実施した。その結果、木簡の図録類からは十分にわからない情報を数多く得ることができた。なかでも最大の成果と考えているのは、「日本古代木簡の視角機能」という新たな視点を打ち出したことである。これまでの木簡研究では、文面を中心とした分析に主眼が置かれていたが、木簡そのものが醸し出す視覚効果についても目を向けるべきことを提言した。また、木簡の機能に関して、従来は実用的な側面に注目が集まりがちであったが、木簡のもつ象徴的な側面にも着目すべきことを提言した。

(2)木簡とその他史料との比較研究

上記(1)の研究成果を踏まえ、さらに木簡以外の史料にも目配りすることによって、どのような場面で木簡が使われ、逆に使われなかったのか、複数の事例を中心に検討をおこなった。これによって、日本古代における日常的な政務処理の一端を窺うことができた。特に大きな成果があがったのは、交通行政の分野である。まず、新出の北宋天聖令を活用し、厩牧令・関市令・賦役令・倉庫令の交通関連条文を中心に、日唐令文の比較検討を詳細におこなうことによって、日本古代交通制度の法的特徴を抽出した。ついで、木簡・古文書などを活用して運用実態を追究し、法的特徴とどのような関係にあるのかを検討した。これによって、文書をめぐる交通のあり方などを明らかにすることができた。

(3)東アジアを視野に入れた、日本古代文書論の再構築

上記の研究を進めながら、国立歴史民俗博物館の国際展示「文字がつなぐ—古代の日本列島と朝鮮半島—」（2014年）に結実する共同研究に加わり、朝鮮半島から日本古代木簡を考える視点を一層強めるとともに、基盤研

究(A)「東アジア木簡学の確立」(代表:角谷常子)、同「古代中世東アジアの関所と交通政策」(代表:鷹取祐司)に参画して、中国木簡の研究動向を学んでいった。こうした共同研究とのリンクによって、東アジアという視点に立って、木簡を中心に、古代文書の特質を考えることができた。特に黎明期の日本古代木簡について、韓国木簡・中国木簡を視野に入れながら、その源流を探る試みに着手し、大まかな見通しが得られたのは大きな成果であったと考えている。さらに、明治時代以来の史学史に関する検討を通じて、「古文書学から史料学へ」という研究動向の流れをたどり、今後の研究の方向性を窺うことができたのも大きな収穫であった。

(4)研究成果の発信

以上の研究成果の大部分について、学会等で口頭発表をするとともに、論文や図書などの形で公表した。図書としては、単著『飛鳥の木簡—古代史の新たな解明—』の韓国語版(2014年)、単著『日本古代都鄙間交通の研究』(2017年)を刊行した。特に前者は、報告者の日本古代木簡研究を海外発信したもので、日本における研究現状の一端を知ってもらう良い機会になったと考える。そのほかの研究成果の海外発信としては、中国・イギリス・フランスでも研究発表ないしコメントをする機会を得た。特に後二者については、これまでほとんど馴染みのない西欧文化圏の研究者と意見交換をすることができたという点で、極めて有意義なものであった。このほか、啓蒙書(共著)や講演会などを通じて、研究成果を一般市民に還元できた点も良かったと考えている。

研究開始当初の背景

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計7件)

①市大樹、激動の飛鳥時代、歴史地理教育、

817、2014、pp. 10-21、査読無

②市大樹、出土文字資料からみた古代の駅家、考古学ジャーナル、2015、pp. 24-28、査読無

③市大樹、日本古代駅伝制度の特質と展開—日唐比較と山陽道—、播磨考古学研究集会の記録』15、2015、pp. 34-88、査読無

④市大樹、黎明期の日本古代木簡、国立歴史民俗博物館研究報告、194、2015、pp. 65-100、査読有

⑤市大樹、日本古代の関制の特質と展開、歴史科学、222、2015、pp. 11-23、査読無

⑥市大樹、隠岐国海部郡の荷札木簡とミヤケ、隠岐の文化財、33、2016、pp. 1-20、査読無

⑦市大樹、門籍制に関する一考察、史聚、50、2017、pp. 27-38、査読無

[学会発表](計14件)

①市大樹、古代の駅と旅、斎宮歴史博物館講演会(招待発表)、2013年7月7日、斎宮歴史博物館

②市大樹、日本古代木簡の視角機能、国際シンポジウム「東アジア木簡学の確立」、2013年8月31日、奈良大学

③市大樹、木簡から日本古代国家の形成過程を考える、第26回浜田青陵賞授賞式・記念シンポジウム(招待発表)、2013年9月21日、岸和田市文化会館ホール

④市大樹、日本古代交通制度の特質と運用実態—関の通行行政をめぐる—、大阪歴史科学協議会12月例会(招待発表)、2013年12月15日、弁天町市民学習センター

⑤市大樹、木簡から見た7世紀後半の東海地方と飛鳥、「古代東海の文字世界」シンポジウム(招待発表)、2014年2月2日、名古屋市博物館

⑥市大樹、日本古代駅伝制度の特質—日唐比較と山陽道—、第15回播磨考古学研究集会(招待発表)、2014年2月16日、姫路市教育会館

- ⑦市大樹、木簡からみた藤原宮、「飛鳥・藤原の宮都とその関連資産群を知ろう、学ぼう」講演会（招待発表）、2014年3月22日、奈良県立橿原考古学研究所
- ⑧市大樹、隠岐国の荷札木簡、島根県古代文化センターシンポジウム「よみがえる古代からのメッセージ—木簡が語る古代社会の実像—」、2014年9月7日、大社文化プレイスうらら館
- ⑨市大樹、木簡からみる文化交流—国の成り立ち、文字の成り立ち—、第2回古代歴史文化賞受賞作決定シンポジウム（招待発表）、2015年2月8日、くにびきメッセ3F国際会議場
- ⑩市大樹、紙木併用時代の日本古代木簡、歴史と文化：晋洲史中的日本古代国際検討会、2015年9月9日、中国清華大学
- ⑪市大樹、飛鳥・藤原京跡出土木簡から見た日本古代国家の形成、日本考古学協会（招待発表）、2015年10月18日
- ⑫市大樹、古文書学から史科学へ—日本古代・中世史の研究分野を中心に—、第97回大阪大学歴史教育研究会例会、2016年6月18日、大阪大学文学部
- ⑬市大樹、A Comment from Japanese History, Law and Writing Habits in the Ancient world、2016年9月1日、Room G22/26, Senate House（イギリス）
- ⑭市大樹、日本古代における漢字使用の始まり、モノと文献でわかる古代・わからない古代、大阪大学文学研究科・フランス国立東洋言語文化大学国際共同シンポジウム、2016年12月3日、国際交流基金パリ日本文化会館ホール

〔図書〕（計19件）

- ①市大樹、他(共著)、週間日本の歴史飛鳥時代2飛鳥・藤原京の理想と現実、総46頁(pp. 4-15 執筆)
- ②市大樹(単著)、飛鳥の木簡(ハンゲル語版、

李炳鎬訳、周留城〔韓国ソウル〕、2014、総307頁

- ③市大樹、他(共著)、文字がつなぐ—古代の日本列島と朝鮮半島—、国立歴史民俗博物館、2014、総248頁(pp. 36-43 執筆)
- ④市大樹、他(共著)、古代日本と古代朝鮮の文字文化交流、大修館書店、2014、総288頁(pp. 31-5 執筆)
- ⑤市大樹、他(共著)、交錯する知—衣装・信仰・女性、思文閣出版、2014、総676頁(pp. 285-303 執筆)
- ⑥市大樹、他(共著)、続日本紀と古代社会、塙書房、2014、総480頁(pp. 3-24 執筆)
- ⑦市大樹、他(共著)、日本古代の国家と王権・社会、塙書房、2014、総534頁(pp. 223-243 執筆)
- ⑧市大樹、他(共著)、東アジア木簡学のために、汲古書院、2014、総305頁(pp. 151-175 執筆)
- ⑨市大樹、他(共著)、岩波講座日本歴史2古代2、岩波書店、2014、総322頁(pp.251-286 執筆)
- ⑩市大樹、他(共著)、文字のチカラ—古代東海の文字世界—、名古屋市博物館、2014、総160頁(pp. 100、102、104 執筆)
- ⑪市大樹、他(共著)、日本「文」学史1—「文」の環境—、勉誠出版、2015、総522頁(pp. 143-146 執筆)
- ⑫市大樹、他(共著)、『日本古代のみやこを探る』、勉誠出版、2015、総630頁(pp. 391-412 執筆)
- ⑬市大樹、他(共著)、グローバルヒストリーと戦争、大阪大学出版、2016、総351頁(pp. 319-345 執筆)
- ⑭市大樹、他(共著)、三重県史通史編 原始・古代、三重県、2016、総861頁(pp. 394-454 執筆)
- ⑮市大樹、他(共著)、日本古代の交通・交流・情報1制度と実態、吉川弘文館、2016、総312頁(pp. 2-30 執筆)

- ⑩市大樹、他(共著)、ここまでわかった飛鳥・藤原京、吉川弘文館、2016、総 256 頁(pp. 143-176 執筆)
- ⑪市大樹、(共著)、日本古代学論叢、和泉書院、2016、総 564 頁(pp. 63-72 執筆)
- ⑫市大樹、他(共著)、古代中世東アジアの関所と交通制度、立命館大学、2017、総 335 頁(pp. 31-78 執筆)
- ⑬市大樹 (単著)、日本古代都鄙間交通の研究、塙書房、2017、総 686 頁

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

市大樹 (ICHI, HIROKI)
大阪大学・文学研究科・准教授
研究者番号：00343004

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()